

2013年度観光学研修「旭山動物園の経営戦略」報告

館野和子*

キーワード：地域資源，旭川市旭山動物園，旭川市博物館

1. はじめに

旭川市における観光学研修は，前年度同様に訪れた先の実務担当の方々から話を伺い，取り組み事例を把握する等の目的で活動した。今回も期間中に降雪はあったものの，天候に左右されることなく予定通りの行程で研修に臨むことができた。北海道の中央に位置する旭川空港は，冬場の降雪時にも大きな影響を受けることなく安定的な運航が保たれることで定評があり，事前調査を含めた4年間（冬場の同時期）とも例外なく順調であった。

2. 研修の概要

2013年度観光学研修の募集にあたり，2013年9月に2～3年生を対象とした説明会を実施した。参加人数は履修登録追加修正期間終了をもって確定し，事前講座に向けての事前課題を課すとともにインハウスツアー会社による旅程説明会を2度実施した。研修日数は以下の7日間である。

参加者 観光学部観光学科4名（3年生男子3名，2年生女子1名）

2014年2月27日（木）事前講座（代々木校舎）

3月3日（月）羽田＝旭川移動・講話（旭川市経済観光部）

3月4日（火）講話（旭山動物園）・園内見学

3月5日（水）講話と創作体験（北の嵐山）・伝統美術工芸館等

3月6日（木）旭山動物園見学・旭川市博物館

3月7日（金）市内見学・旭川＝羽田移動

3月10日（月）事後講座（代々木校舎）

3. 旭川市の観光・活性化について

3-1 旭川市観光の現状

今年度も，市内5条7丁目平和通買物公園旭川フードテラス2階にある経済観光部観光課を訪ね，同市職員の平島淳嗣氏から，平成25年度観光入込客数等についての説明を受けた。東日本大震災の影響を脱しつつあるものの観光入込客数は平成24年度を下回っていることや，宿泊

* 東海大学観光学部観光学科

延数と外国人宿泊延数は前年度、前々年度比で伸びていることが確認された。なお、過去の最高値は、観光入込客数と宿泊延数が平成19年度、外国人宿泊延数が平成22年度であることから、徐々に回復しているという状況である。

平成25年度の実績として以下（表1）が示されている。データのうち、国（地域）別の実績として、第1位台湾、第2位香港の順位は変わらないなかで、中国は第4位から3位に、タイが第5位から4位に上がっている。平成24年度に第3位だったシンガポールが前年比を割っていることが順位交替の要因として大きいものの、飛躍的な伸びを示すタイと台湾の宿泊延数に注目したい。

観光入込客数の減少（対前年度比92.5%）、ならびに宿泊延数の増加（対前年度比109.2%）との関係について、旭川市は「入込客数の6割以上を占める、貸切観光バス利用者の減少」と「パッケージ旅行から個人旅行への旅行形態の変化、ならびに通過型観光から滞在型観光への転換」と分析している。これまでは通過型観光客をいかに引き止め、宿泊に結びつけるかということが同市の懸案事項であったが、入込客数に比して宿泊延数の伸びが大きいことから宿泊増加策の成果が確認されたと言える。

国（地域）別の宿泊延数について、第5位のシンガポールは、対前年度比マイナス10.8%と落ち込んでいるように見えるが、市の分析によればリピーター率7割強、7日以上滞在が6割弱、団体ツアー比率1割強と東アジア全体の中では個人旅行客が一番多い状況である。第4位のタイに関しては、旭川市が拡大市場第1位に挙げている。平成24年10月から、タイ国際航空の新千歳＝バンコク路線の定期便就航を機会に、1年を通して急激に道内への入込数が増加したことが旭川市にも好影響を及ぼし、リピーター率6割弱、4～6日間滞在、団体ツアー・パッケージ利用率3割弱の実績につながっている。

第1位の台湾は、平成9年度から17年間、訪日外国人来道者（実人数）で常に1位であり続け、近年では観光を兼ねて滞在中に腎臓透析を受ける富裕層観光客が訪れている。旭川市はも

表1

平成25年度旭川市観光入込客数等（確定値）	
観光入込客数	5,333,200人（対前年度比92.5%）
宿泊延べ数	686,500泊（同109.2%）
外国人宿泊延べ数	48,667泊（同155.9%）
国（地域）別の宿泊延べ数	
第1位 台湾	13,211泊（対前年度比213.0%）
第2位 香港	7,094泊（同117.3%）
第3位 中国	6,625泊（同147.8%）
第4位 タイ	5,235泊（同343.7%）
第5位 シンガポール	5,173泊（同89.2%）
第6位 韓国	2,387泊（同161.3%）

出典：旭川市経済観光部観光課 HP

とも医療機関が多く、その機能が充実していることから、観光客にも対応できるような医療面の条件整備により高いハードルをクリアした高付加価値のメディカルツーリズムを推進している。旭川市の重点市場第1位の台湾は、ビジネス需要よりも観光需要の割合が高く団体ツアー比率4割強、半数以上を女性が占め、特に20歳代～30歳代が多くリピーター率が8割に上っている。

旭川市は、観光を地域産業発展の重要な柱として位置づけ、官民挙げたオール旭川の体制¹⁾を敷いている。オール旭川の体制とは、旭川観光協会と旭川コンベンションビューローを統合した「一般社団法人旭川観光コンベンション協会」や、観光課と観光情報センターを一体化させた「旭川総合観光情報センター」のオープン等の観光に関わる市の組織再編による事業や、企業、市民等がそれぞれの役割を担う体制を指している。同市の優位性・特性を示す地域資源を「4つの要素：食・自然・冬・旭山動物園」として位置づけ、一層の知名度向上と滞在型観光の促進に取り組んでいる。

以下（表2）の外国人宿泊延数に着目すると、平成25年度は平成22年度に続く実績であり、過去9年間のうちで2番目に位置している。

平成25年度の備考欄に、JR特急列車の一部運休が挙げられているが、その運休の原因となった度重なる出火や脱線事故事例が残念ながら、各数値を伸ばしきれない一要因となっているように思われる。観光入込客数は7月と8月に道外客数（含む訪日外国人）が半数を超えるものの、その他の月は一定して道内客数が上回っており、11月の道内客数 / 道外客数（含む訪日外

表2

（単位：人）

	観光入込客数	宿泊延数	外国人宿泊延数	備考（北海道全体の経済的要因）
H 17(05)	5,643,100	596,900	24,179	知床世界自然遺産登録
H 18(06)	6,977,100	697,400	28,893	
H 19(07)	7,334,300	748,000	40,427	北海道洞爺湖サミット開催決定
H 20(08)	6,731,400	691,600	36,090	サミット開催、世界的な景気後退
H 21(09)	6,365,200	660,200	37,911	高速道路割引、円高、新型インフルエンザ流行
H 22(10)	6,071,400	621,700	50,475	APEC 貿易担当大臣会合、東北新幹線新青森駅開業、口蹄疫、東日本大震災
H 23(11)	5,410,300	592,600	25,123	東日本大震災の影響、修学旅行先の道内振替、避暑目的長期滞在客増、自粛ムードの緩和
H 24(12)	5,763,800	628,400	31,223	観光需要の回復、観光キャンペーン、高速自動車道延伸、5月と冬の悪天候
H 25(13)	5,333,200	686,500	48,667	緩やかな景気回復、大規模イベント、4月の低温、JR特急列車の一部運休、旭川 貸切バス利用者減と個人旅行増、通過型から滞在型への緩やかな転換

出典：旭川市経済観光部ならびに北海道経済部 HP²⁾

国人）は約2.5倍である。ビジネス、観光ならびに日常生活に欠かせない北海道内の鉄道網については、安全報告書で事実関係や再発防止策の公表を行うとともに、安全基本計画、安全性向上への取り組みとその進捗状況をホームページで情報公開していることによって全国的に広がったイメージを払拭し、今後の利用実績の伸びにつながることを期待されている。

旭川市は札幌市に続く道内人口第2位の都市だが、観光客数では札幌市、小樽市に続いて第3位であり、その順位は前年度までと変わっていない。空の玄関口の旭川空港は、国内から首都圏、中部圏、関西圏（期間限定）の直行便があり、国際線は定期便として台湾、韓国（期間限定）がある他、東南アジア地域とチャーター便で結ばれていることから同市の施策と相まって来訪者が増加するものと思われる。北海道のほぼ中央の海がない街のため、道内の海のある街と提携して、地域の魅力と観光資源を特徴づけたいとのことである。

市職員平島氏の説明中で「ハレ（非日常）の観光からケ（日常）の観光へ」という見解が示された。観光客誘致のための取り組みは数々行ってきたが、ハレの観光を追い続けると壁に突き当たり、観光地側の体力低下を招きかねないとの懸念からであり、観光客がケ（地域の日常）を楽しめるような、魅力あるコンテンツの発信を軸とした日常生活のお裾わけをしたいと話されていた。観光のために新規に作り込むコンテンツではなく、市の地域資源と位置付ける4つの要素「食・自然・冬・旭山動物園」のなかの日常の魅力を引き出し、地域にある元々の特徴、魅力を感じてもらうことが目標である。

訪れた観光客が媒体となりローカルからいきなり世界に発信されるSNSのメリットは大きく、海外の人々にとって母国語で発信された情報が最も信頼に足るものとなるため、次の訪日外客を誘致するという現状がある。旭川市は、観光客視点のコンテンツを国内外に発信してもらうために、Wi-Fiのさらなる充実や絶景スポットの紹介は必須であるとして積極的に取り組んでいる。

平島氏は九州出身だが、その視点や企画にはごく自然に出身地の強みが盛り込まれるのではないか。観光資源を活用するために必要なものはよそ者等とよく言われるが、期間限定のプロジェクトメンバーではなく、市の職員が道外出身であって「故郷の観光現状との違い」を熟知していることは大変意義深いと考える。

3-2 北の嵐山

北の嵐山は、旭川市中心部から車・バスで15分ほどの北西部（現・旭岡地区）嵐山公園にある。京都市の嵐山を連想させるが、そこから名称を採用した訳ではなく、もともとこの地域にあった地名である。昭和40年代に工房「大雪窯」と「溪雪窯」が出来て以来、「嵐山陶芸の里」と呼ばれてきたが、現在では陶芸・染色・ガラス工芸・木工クラフト・茶房・庭園・食等が集まる芸術家村となり、旭川市の観光スポットとして紹介されている。平成22年度の地域資源全国展開プロジェクト「森・芸・民のおもてなし事業」³⁾をきっかけに、嵐山陶芸の里から「北の嵐山」に名称を変更して現在に至っている。

研修では、今年も北の嵐山観光連絡協議会の会長得永光利氏、事務局長菅井淳介氏、山田克己氏に話を伺うとともに、ガラス工芸の創作やガラス吹き体験をした。

現在住んでいる方々は、「同じ分野のものを創らない」という不文律を共有して、建物の50%は住居とするルールを守りながら創作活動をしている。北の嵐山においては観光客誘致のために何かを行うのではなく、異なる分野の芸術活動とその作品がコンテンツとなる。昨年度、「観光地というよりは自然発生的な創作活動地域であり、傍から見れば観光で活性化させようとするハングリーさに欠けているかもしれない」との説明があったが、観光地と位置付けるよりは、芸術家の活動地区という特性を魅力としてさらにアピールすることや、作品を積極的に販売していくことが活性化策となるのではないかと。訪れる側は、各分野で活動する市民が旭川市に対する思いや将来像を共有していることに納得するものであり、活動領域が異なっていることや、それ以外の差異を「魅力的な多様性・地域資源」として好ましく受け止めることだろう。

3-3 動物園の経営戦略

旭川市経済観光部に属する「旭川市旭山動物園」の役割・使命とする場は、レクリエーションの場・教育の場・自然保護の場・調査研究の場の4つである。「ペンギん館」を開館した平成12年度に入場者が50万人を超えて、その後もうなぎ昇りに入場者数は伸びていった。平成18年度と19年度に300万人を超えているが、動物園の収容能力をはるかに超えた事態だったという。園長の坂東元氏によると、現在の150～170万人ほどが妥当な入場者数とのことである。そして、たとえ160万人に抑えられたとしても、夏期多客期には入園30分待ちであったり、せっかく入園してもゆっくり見ることが出来ないのだという。かつては市内の幼稚園児や小学校低学年生の遠足を積極的に受け入れていたが、入場者数に押されて殆ど来なくなってしまうという状況を聞き、複雑な思いがした。

話を伺った時期は今回も3月上旬だが、役所として来年度を想定しての計画立案と関わる議論をしているとのことだった。

今年度の研修では、旭山動物園が2008年から取り組んでいる「恩返しプロジェクト」を事前に学ぶことから始めた。このプロジェクトは、動物達のふるさとで野生動物の保全活動を行うボルネオ保全トラスト事業責任者の坪内俊憲氏が旭山動物園を訪問したことから始まったという。動物達の本来の生息域保全活動として、絶滅寸前のボルネオゾウを救うための活動は、2009年8月の旭川市長記者会見を契機に、「恩返しプロジェクト」として本格的にスタートしている。ボルネオ島では北海道とほぼ同じ面積のジャングル林を伐採したアブラヤシ・プランテーション片隅の川沿いに追いやられている動物達のうち、ボルネオゾウが地元企業にとってはアブラヤシ林を荒らす害獣と化している。アブラヤシを精製して採るパーム油脂は、食品、生活用品から燃料まで幅広く利用されており、私達の生活に欠かせないものとなっている。野生動物を保護するために利用を止めよう、といった呼びかけが功を奏する訳ではないため、現実的な対策として喫緊の課題から着手しているとのことである。アブラヤシ林に入り込んだゾウを川沿いの狭い生息域に戻すために行われた現地視察を皮切りに、レスキュー用の檻を送る企画から始動した旭山動物園のプロジェクト活動は現在も進行中である。

人間が想像する以上の能力を有する動物達だが、一旦動物園に入ったら一生出られない。そ

うした動物達の行動展示をする動物園が、さらに野生動物保護プロジェクトに取り組む事例はほかに見られないという。旭山動物園を訪れるにあたり、学生達がこれらの経緯を把握することが大事だと考え、事前講座でその概要を把握する時間をとったが、「土地を再び野生動物達に返す方法はあるのだろうか？どうしたらそう出来るだろうか？」等の質問につながっていた。

3-4 旭川市博物館

今年の事前研修課題は「旭川市の歴史」とした。特に旭川は、明治時代に開拓・開村されたところであり、訪れる前に学ぶ歴史が滞在中に見聞きするものとの関連を考えるきっかけになることを期待した。過去2回は、旭川校舎芸術工学部を訪れて大野教授の専門分野からの講話と学部生の研究発表、学部の工芸創作活動の現場や国内外の椅子コレクションの見学を行っていた。しかしながら平成26年度から旭川校舎が札幌校舎に集約されることに伴って閉鎖されたことから、プログラムに修正を加え、初めて旭川市博物館を訪れることとした。

学生のなかから駅周辺圏内で一番興味が持てたところだった、訪れてよかったという感想も聞かれたことが幸いだった。関東地域とは異なる歴史を歩んだ土地の歴史は興味深く、学ぶべきことが多い一方、時系列に全体把握することやきちんとした理解をすることは容易ではなく、一時触れて満足してしまわないように気をつけたい。要所に声のガイダンスと配付資料があるので、それらを参考に館内を回ることができるものの、しっかりと見て学ぼうとすれば2時間以上かかるような展示・設営の数々である。あらかじめ調べた、限られた知識をもとに回った館内で数多くの展示品群に出会った。できることならば地元ボランティアガイド等、人による案内・具体的な解説等が望まれた。

4. まとめ

2月上旬の冬まつりと3月中旬の“バーサーロペットジャパン⁴⁾”開催期間の狭間に訪れた旭川では、路線バス、タクシーと徒歩を移動手段として行動した。風がなく、時折の降雪があっても再び青空となるような穏やかな環境での研修となった。旭川校舎閉鎖により、今回で旭川研修を一旦終了するが、大学校舎のある地で観光学研修を行うとの学部方針により3年間実施したプログラムにご協力いただいた旭山動物園、北の嵐山観光連絡協議会、旭川市経済観光部の関係各位に深く御礼申し上げたい。

注

- 1) 旭川市「旭川市観光基本方針」(平成26年3月発行の5年計画書)
- 2) 北海道経済部観光局「観光入込客数(実人数)の推移」
- 3) 旭川商工会議所平成22年度「北の嵐山 森・芸・民のおもてなし事業」報告書
- 4) 旭川市主催国内最大級のクロスカンリースキー大会、2014年3月で第34回を迎えている。

参考資料

旭川市経済観光部 2014 「旭川観光基本方針」, 2014年3月, 旭川市。

北海道経済部観光局 2014 「北海道観光入込客数の推移（平成9～25年度）」，北海道庁，<http://www.pref.hokkaido.lg.jp/kz/kkd/irikominosuii.htm> 2014年8月10日閲覧による。